長岡宮大極殿後殿（小安殿）の調査
～長岡宮跡第 490 次調査地元説明会資料～

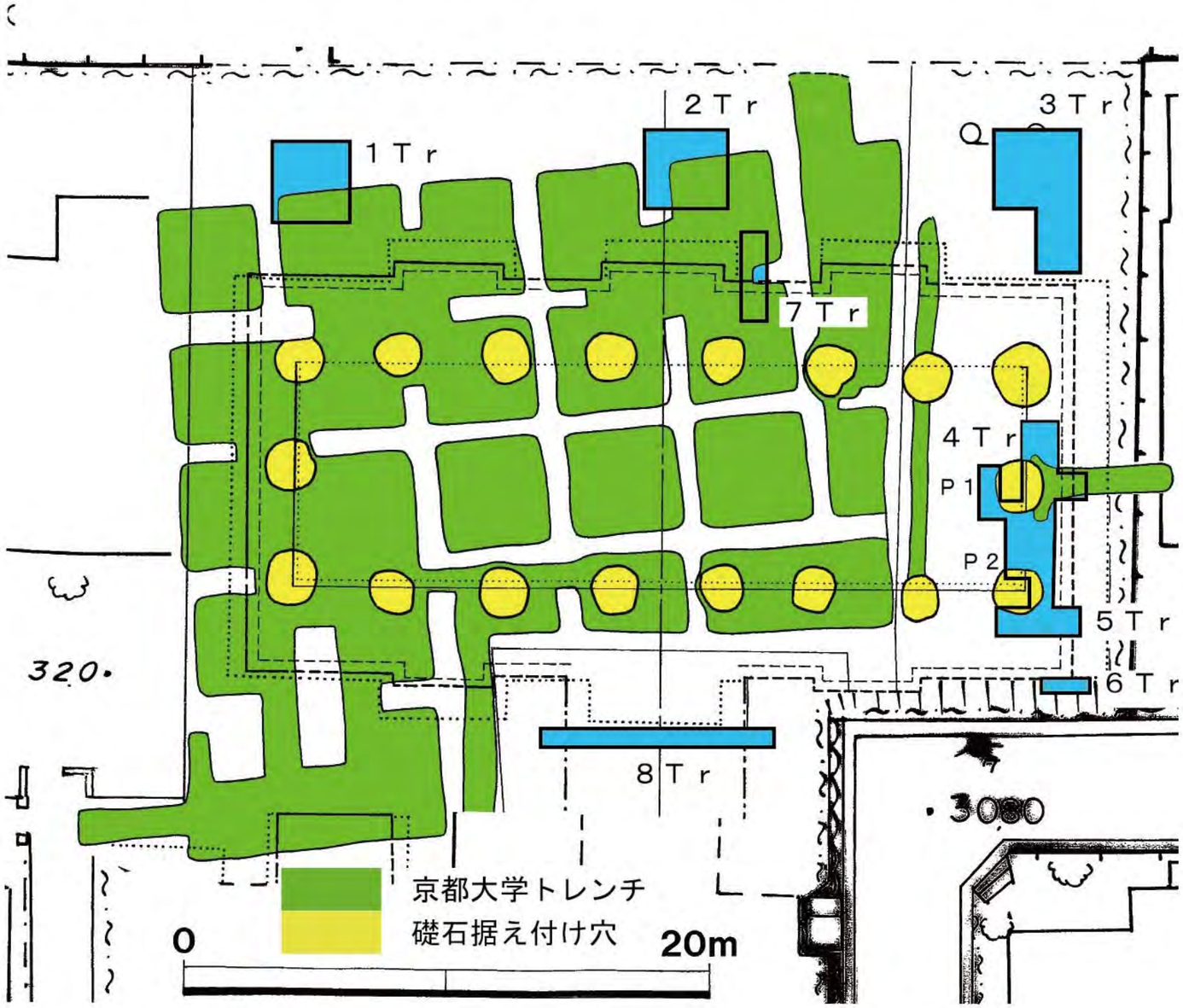
日　　時　平成 24（2012）年８月 25 日（土）
所 在 地　向日市鶏冠井町大極殿 26-28 ほか
調査期間　平成 24 年７月 17 日～平成 24 年８月 31 日（予定）
調査所管　向日市教育委員会
調査担当　公益財団法人向日市埋蔵文化財センター

大極殿後殿は、大極殿院を構成する施設の一つで、正殿である大極殿の北に位置する建物です。天皇が政務や儀式のために大極殿にお出ましになる際に休息所として用いられました。平安宮では小安殿（こあどの）と呼ばれていました。

昭和 36（1961）年に京都大学によって発掘調査が行われ、東西７間、南北２間、柱間 14 尺（約 4.1m）の礎石建物が確認されました。その後 50 年を経て、公園の整備工事に先立って再発掘しました。

調査では、８箇所のトレンチを掘り下げ、東側の第４・５トレンチで建物東端の礎石据え付け穴２基（Ｐ１・２）、北側の第１・２・７トレンチで基壇外周の石敷き、また下層で後殿造営に先立つ長岡京期の整地層を確認しました。礎石据え付け穴は、直径約 2.0 ～ 2.3m、深さ約 0.6mの大きさで、建物の重みを受ける礎石を支えるため、根固めの石と版築によって叩き締められた粘土で堅固に埋められていました。石敷きは、数cm～こぶし大程度の礫が基壇に近いところを中心にやや密に広がる様子を確認しました。調査区のほぼ全域で確認した整地層は予想よりも厚く、約 0.5mの厚さでした。今回、南側に位置する大極殿や宝幢遺構とほぼ同じ標高で礎石据え付け穴や石敷きを確認しましたが、基盤の段丘層から構築される大極殿や宝幢遺構とはまったく異なります。後殿は、大極殿から北へくだる斜面を造成して建造されたことがわかりました。また、京都大学が調査した時のトレンチを５箇所で確認しました。50 年前の成果を再測量し、現在の精度で地図上に当てはめるための貴重な資料を得ることができました。

大極殿後殿は、古代宮都の諸施設の中で大極殿につぐ重要な建物の一つです。その基礎構造が明らかになりました。長岡宮大極殿は後世に大きく破壊され、礎石はおろか基壇とともに礎石据え付け穴も確認できませんでした。今回の成果によって、長岡宮大極殿をはじめ、都城の重要な建物について、基礎の構造や構築法に関する重要な手掛かりを得ることができました。

礎石据え付け穴Ｐ１（第４トレンチ･北から）

基壇外周の石敷き（第２トレンチ･西から）